

愚かなインディアンの話



ジャングルを流れる大きな川を、インディアンの一団がカヌーで下っていました。それぞれのカヌーには、食糧や武器が山積みされています。隣村から補給されたものを自分たちの村まで運ぼうとしていたのです。

さて、一団の中には、インディアンの中でも勇士として名をあげた者がいましたが、しばらく川を下ると、彼は自分のカヌーに水漏れがあることに気づきました。しかし、何も言わずに黙々と漕ぎ続けます。村に到着するまでもつかどうか、気が気ではなかったものの、他の者たちを止めてまで助けを求める気にはならなかったのです。カヌーを岸につけて修理するとすれば、自分のせいで皆を待たせることになります。自分が遅れの原因になるのはいやだと考えた勇士は、そのまま何も言わずに漕ぎ続けました。

そばでカヌーを漕いでいたインディアンたちは、勇士のカヌーが浸水し、必死に漕いでいるにもかかわらず、遅れを取り始めていることに気がつきました。しかし彼らも、皆がその災難に注目して、勇士に恥ずかしい思いをさせるようなことがあってはならないと考えて、そのまま進んで行ったのでした。

勇士のカヌーはますます後方に取り残され、水かさが増し、ついに沈み始めました。運んでいた食糧や道具や武器も、川に落ちそうです。それで勇士はようやく大声で助けを求めました。

後方からの声を聞いて、他のカヌーは勇士を救おうと向きを変えましたが、流れに逆らって漕ぐのは容易ではありません。結局、どうにか勇士を救うことはできたものの、積荷とカヌーは沈んでしまいました。

「皆、何という愚か者なのだ！」村で待っていた酋長は、そのいきさつを聞いて怒り心頭です。水漏れなら、もっと早くに対処していれば大事に至らずに済んだのに、助けを求めなかったのは何とも愚かなことだし、水漏れを知っていながら見て見ぬ振りをしていた他の者たちも愚かであると嘆き、勇士からその称号を取り上げることにしました。そして、こう言ったのでした。

「自分の問題を正さなければならないことや遅れることの恥は、カヌーや食糧を失い、我々皆が被害をこうむることに比べたら何でもない。下手なプライドは捨てて、災難を免れる方が、プライドを守って、すべてを失ってしまうよりいいではないか！」



あなたは失敗をおおい隠そうとするか、それとも思い切って告白するだろうか？ 失敗を認めるなら、大半の人はあなたをもっと尊敬することだろう。